古代文字資料館発行『KOTONOHA』第99号（2011年2月）

六・宿・熟などにおける文白異読の問題

中村雅之

1．通摂入声の文白異読

通摂入声字の中には、「六（lu、liu）」「宿（su、xiu）」「熟（shu、shou）」など、/-u/に対する/-(i)əu/という形で文白異読を持つものがある。しかし、これらが宕江摂入声や曽梗摂入声における文白異読と同列に扱うべきものか否かについては疑問がある。「剥（bo、bao）」「角（jue、jiao）」「得（de、dei）」などにおいては、白話音（bao、jiao、deiなど）が遼代以来の伝統的な北方音を受け継いだものであり、文言音（bo、jue、deなど）が明代以降に南京官話音の影響によって生まれた音形と思われることは、これまでにも述べた通りである。一方、通摂入声においては必ずしもそうとは言えない。

2．白話音「六（liu）」「宿（xiu）」「熟（shou）」について

『中原音韻』（1324）では、通摂入声字は大多数が魚模韻に、ごく少数が尤侯韻に登録されている。「六」は尤侯韻のみに収められ、「宿」「熟」などは魚模韻と尤侯韻の双方に重出する。楊耐思（1981）の再構音では尤侯韻のものが「六/liəu/」「宿/siəu/」「熟/ʃiəu/」であり、魚模韻が「宿/siu/」「熟/ʃiu/」である。前者が現代音の「六（liu）」「宿（xiu）」「熟（shou）」に対応するもの、後者が「宿（su）」「熟（shu）」に対応するものと言えよう。

一方、元代のパスパ文字漢語表記を見ると、いわゆる白話音「六（liu）」「宿（xiu）」「熟（shou）」に対応する音形は見えない。「六」「宿」「熟」等は全て「-eu」すなわち/-y/という韻母を持つものとして登録され、現代音の/-u/に対応する。

さらに、『洪武正韻訳訓』や『四声通考』の俗音（後者は「翻訳老乞大・朴通事」の左側音に引かれる）によって知られる15世紀半ばのハングル表記でも、やはり「六（liu）」「宿（xiu）」「熟（shou）」に対応する音形は見えない。全て「-u'」すなわち/-u/という韻母であり、これも現代音/-u/に対応する。

要するに、白話音とされる「六（liu）」「宿（xiu）」「熟（shou）」の音形は、宕江曽梗摂入声における白話音とは異なり、遼代以来の伝統的な北方音と見なすことはできない。むしろ、通摂入声字としては文言音とされる音形（/-y/ないし/-u/）の方が伝統的なものであり、『中原音韻』に僅かばかり見える/-iəu/の音形は、『蒙古字韻』や『洪武正韻訳訓』などと比較すれば、非体系的な地方的変種と考えざるを得ない。したがっ

て現代音の「六(liu)」「宿(xiu)」「熟(shou)」なども、そのような地方的変種が取り込まれたものであって、伝統的な白話音と同一に扱うべきものではないことになる。

3. 高暁虹(2009)の解釈

高暁虹(2009)では、まず金元代の官話を北部官話(北京周辺)、中原官話(汴洛地方)、南部官話に三分する見解に従う。そして通摂入声三等字の白話音(/-iəu/に相当)は北部官話の口語音、文言音(/-y/に相当)は遼金時代の北部官話の読書音とする。高氏によれば、『蒙古字韻』と『中原音韻』はともに北部官話を代表するが、前者は知識人の読書音であり、後者は庶民の口語音であるという。『中原音韻』の通摂入声字はいわゆる文言音が大勢を占めており、白話音は少数であるが、それは元代以前にすでに文言音が強い影響を与えた結果ということらしい。

高氏の解釈では、元代以前の北京語にすでに文白異読があったということになり、文言音と白話音の来源の探求としてはやや不満が残る。また、北京語の文白異読の形成時期を高氏は、古い順に通摂＞宕江摂＞曽梗摂と想定しているが、むしろ通摂が最も新しいのではあるまいか。それは北京語(ないしその周辺の言語)の文白異読を示す最初期の資料である「翻訳老乞大・朴通事」右側音に、通摂入声字の文白異読がまだ見えないことから窺える。

4.「都(du、dou)」「露(lu、lou)」との平行性

通摂入声字のいわゆる白話音(/-(i)əu/)の音形が元代のパスパ文字資料や明代中期のハングル資料に確認できない以上、そのような音形は北京語においては明代後期以降に形成されたと考えるべきであろう。その際、興味深いことは、入声字ではない「都」「露」にも類似の俗音があることである。明清代の官話音としては「都/tu/」と「露/lu/」しかないが、清代の北京語には/-əu/の韻母を持つ音形が現れる(エドキンズの資料などで確認できる)。この二種の音形(/-u/と/-əu/)はちょうど通摂入声字と平行する関係にあり、/-əu/が新しい音形である点も共通している。つまり、通摂入声字における/-iəu/の音形は、すでに『中原音韻』に若干見えるとはいえ、北京語における/-(i)əu/の音形は「都」「露」などと同様にかなり後になって(明代後期以降に)生まれたものである可能性が高い。

5. 小結

『中原音韻』が北京語そのものの体系を示したものでないことは、「六」の音形を見

ただけでも明らかである。

「六」は元代のパスパ文字資料では/ly/、明代中期のハングル資料では/lu/である。/ly/と/lu/とは、一つの体系の中での音変化(/ly/＞/lu/)と見なしうる。通摂入声字は元代以前は/-y/であったが、明代中期までにほぼ直音化した。ただ牙喉音声母の後では直音化せずに/-y/のままである(「曲」「玉」など)。来母の「緑」が/ly/となるのは完全な例外である。

一方、『中原音韻』における「六」は/liəu/であり、/ly/にも/lu/にも登録されていない。パスパ文字表記やハングル表記の基づいた所が北京語(ないしそれに近い方言)であると考えてよいならば、『中原音韻』は少なくとも北京語そのものを体系化したものではない。

「六」は「陸」と同様に、元代北京語では/ly/、明代北京語では/lu/であったと考えられる。したがって、現代北京音において/liəu/となっているのは、明代後期以降に獲得した新たな音形と考えるべきで、『中原音韻』の音形に直結させるべきではない。しかしながら、『中原音韻』と北京語とが共に、「六/liu/」の音形を(北京以外の)北方音から採用した可能性はある。高暁虹(2009)は通摂入声字を/-iəu/と読む地名が河北省に多いことを指摘している。そのような音形が一部分『中原音韻』に収録され、また、その地域の人々が多く北京の住民となった結果として北京語に/liəu/のような音形が一般化したということは十分に考えられることである。

参考文献:

楊耐思(1981)『中原音韻音系』, 中国社会科学出版社.

高暁虹(2009)『北京話入声字的歴史層次』, 北京語言大学出版社.